

研究課題	道徳科における児童が自己の生き方についての考えを深めるプロセスの追究		
氏名	浅部 航太	所属	教職大学院
		職名	准教授
APRIN e-ラーニングプログラムの受講 ☒ ←受講済の場合はチェックをすること			
【研究成果の概要】（文字の大きさ9ポイント・字数800字～1600字程度） 本研究は、小学校道徳科の授業において、児童がどのようにして自己の生き方を明らかにしていったか、そのプロセスを長期的・質的に明らかにすることを目的としたものである。 2018年から2021年にかけてX市立Y小学校で実施された99時間の道徳授業の中から、特に学期末の振り返りにおける児童の発話に着目し、複線径路等至性アプローチ（TEA）を用いて分析した。 対象は、小学校第4～6学年の約3年間を通して、卒業時に自己の生き方を明らかにしていたとされる児童4名である。複線経路等至性モデリング（TEM）では、等至点（EFP）を「自己の生き方を明らかにする」と設定し、そこに至るまでの必須通過点（OPP）や分岐点（BFP）を特定した。 さらに、児童の分岐点における内面的変容に迫るため、発生の三層モデル（TLMG）を用いて、第1層：個別活動レベル、第2層：記号レベル、第3層：信念・価値観レベルの3層から、各児童の自己の生き方の形成要因を探った（下図参照）。 分析の結果、自己の生き方を明らかにした児童にはいくつかの共通点が見られた。まず、いじめ問題やコロナ禍といった身近な現代的課題を扱った授業を通じて、自己の弱さに気づいた経験があった。また、「自分にできることを考える」契機を持っていたことも共通しており、これらが自己の生き方の形成に重要な影響を与えていたことが示唆された。 加えて、TLMGの分析からは、「支え・支えられる実感」「人とのつながり」など、他者との関わりを通じて自己肯定感が高まり、それが生き方を考える契機となっていたことが示唆された。 すなわち、児童が自らの弱さに向き合い、他者との関係性の中で「自分にできること」を模索するプロセスこそが、自己の生き方を形成する核心的な経験となっている可能性がある。 本研究の成果は、道徳科の評価や授業改善に資するものである。単発的な授業評価にとどまらず、児童の長期的な思考の変容過程を、時間を捨象せずに捉える重要性を示した点に意義がある。今後はさらなる事例の蓄積と比較を通じて、自己の生き方についての考えを深めることを可能とする道徳教育・道徳科の学習はどのようにして生み出すことができるかを、一層解明していく必要がある。 課題としては、データ収集の方法が挙げられる。本来TEAのデータ収集では、作成したTEM図を用いて研究協力者との再面接を行うインタビューが推奨されている。このことから、今後はインタビューを用いたデータ収集について検討していく必要がある。			
図. 児童Aの発生の三層モデル（TLMG図） この図は、児童Aの発生の三層モデル（TLMG図）を示しています。縦軸には3層が示されています。 第3層 信念・価値観レベル：自分なりの生き方。目標として「人の役に立てるような生き方をしていきたい」とある。 第2層 記号レベル：生き方に結びついた思考や葛藤。中心には「人とのつながりを感じる」とあり、その下に「『ありがとう』の一言でこんなに人とつながれる気がするのかが」とある。右側には「促進的記号」として「多角的な思考」が示され、その下に「（主観的）家族が悲慘な状態で棺に入れられていたら耐えられない」と「（客観的）今の親戚の姿を見ていると、目も少し見えて、楽しく生きられている」とある。 第1層 個別行動レベル：生き方を見つける過程の行動。左側には「自分の意見を主張し、自分らしく生きることについて考えたい」と「心が温かくなる」があり、右側には「代わりに故人の身内から『ありがとう』と言われる」「亡くなった親戚に『ありがとうの手紙』を書く」と「『ドナーカード』の学習で、移植をした親戚と、葬式を見てきた自分の気持ちで考える」とある。 矢印は、第1層から第2層、第2層から第3層へと上向きに進む流れを示しています。			
【研究成果発表方法】 ・「児童が自己の生き方についての考えを深めるプロセスの追究—複線経路等至性アプローチ（TEA）による理解を通して—」，浅部航太・鈴木賢一，日本道徳教育学会第103回大会・自由研究発表（口頭発表）			

※発表論文名（口頭発表を含む）、氏名、学会誌等名（投稿中・投稿予定・執筆中）を記入すること。

※本経費を用いて、報告書（冊子等）を作成した場合には、本様式とともに1部を提出すること。

なお、提出された報告書は教育実践研究推進本部を通じて附属図書館へ寄贈する。